

平成二十八年年度 入学試験問題

国 語

文・教・経・医―医 二月二十六日(金) 一四・一〇―一五・五五

理(□のみのみ)

一四・一〇―一四・五五

注意事項

- 1、試験開始の合図まで、この冊子と答案紙を開いてはいけない。
- 2、問題冊子のページ数は十一ページである。
- 3、問題冊子とは別に、答案冊子中の答案紙が文学部、教育学部、経済学部と医学部医学科志望者には三枚、理学部志望者には一枚ある。
- 4、落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあつたら、ただちに申し出よ。
- 5、理学部志望者は、□のみを解答せよ。
- 6、解答にかかる前に答案紙上部の折り目をていねいに切り離し、それぞれ、所定の二箇所受験番号を記入せよ。
- 7、解答は答案紙の所定の欄に記入せよ。所定の欄以外に書いた解答は無効である。
- 8、問題冊子の余白は草稿用に使用してもよい。
- 9、試験終了後、退室の許可があるまでは、退室してはいけない。
- 10、答案紙は持ち帰ってはいけない。問題冊子は持ち帰ってもよい。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

アフリカの赤道直下、ヴィルンガ火山群の山地林でマウンテンゴリラの観察を始めて間もないころのことだ。私がゴリラから数メートルの距離を置いて観察していると、近くを通りかかったシリ―という若いオスのゴリラがちらつと私の方を見て近寄ってきた。これはまずい、と私は思った。

それまで野生ニホンザルの調査をしてきた私は、サルに近づかれたらサルのルールに従って行動せよ、という鉄則を守ってきた。ニホンザルの社会では、相手を見つめるのは強いサルの特権である。弱いサルは強いサルに見つめられたら、決して見返してはいけない。目を合わすと挑戦したと受け取られ、強いサルから攻撃されることになるからだ。目をそらすか、歯をむき出して笑ったような表情を浮かべ、自分が逆らうつもりがないことを表明しなければならない。そこに相手と競合するような食物があればなおさらのこと、決して食物に手をのばしてはいけない。だいたいサルが近づいてくるというのは、私の周りにサルの関心を引くものがあるからだし、そのサルは自分の方が私より強いと感じているはずなので、刺激しないようにそつと目を伏せておく方が無難である。

A、ゴリラのシリ―が近づいてきたときも、私はシリ―の方を見ないように目を伏せた。ところが、シリ―は一メートル前で止まって、じつと私の顔をのぞきこんだのである。若いオスとはいえ、一〇〇キログラムを優に超える巨漢である。グローブのような手をしているし、長くてスルドい犬歯が光る。つかまれて咬まれてもしたら重傷を負いかねない。私は逆らうつもりがないことを示すため、さらに横を向いた。

B、シリ―は私が向けた方へと顔を寄せ、さらに私の顔を正面からじつと見つめたのである。顔と顔の距離はわずか二〇センチほどしかない。私は恐怖に駆られて目を伏せてじつといた。意外なことに、シリ―はしばらく私の顔をのぞきこむと、低い声でうなり、二、三步遠ざかると、ぼこぼこぼこぼこと両手で力強く胸を打っては足早に遠ざかって行ったのである。

しばし^c、果然とシリ―を見送った私は、ひよつとしたらシリ―の行動を私が誤解したのではないかと思った。ニホンザルと同

じことだと思っていたが、ゴリラが顔をのぞきこむのは違う意味があるのかもしれない。そこで、私はゴリラどうしの行動をもっと注意深く観察してみることにした。すると、これまでただ近くによるだけで何もしていないと思っていた行動が、実は重要な機能を果たしていることに気づいた。ゴリラどうしが近づきあって顔を合わせる。

C

ニホンザルやチンパンジー

のように体に触れることもないし、抱き合ったり、相手に馬乗りになったりすることもないので、私は何か意味のある交渉をしたとは見なしできなかった。ところが、それは、ゴリラのあいさつ、遊びの誘い、求愛、仲直り、けんかの仲裁などに用いられていたのである。顔を合わせても、どちらかがニホンザルのような歯をむき出す笑いを浮かべることはない。どちらも無表情のまま、一分近くも至近距離でじつと顔を合わせるのだ。何とも不思議で静かな社会交渉に見えた。

そのうち、私はこれがゴリラの社会性を表す典型的な構えであることに気づいた。ニホンザルは常に自分と相手のどちらが強いかを認識し、確かめながら暮らしている。群れで仲間といっしょに移動すれば、食物や休み場所、交尾の相手をめぐって仲間と競合が生じる。それを防ぐために、あらかじめ優劣関係を作り、弱い立場のサルが自分の行動を抑制するように調節しているのだ。ところが、ゴリラはサルのような優劣関係を認識していない。ゴリラのオスはメスの二倍近い体重を持つ。子どもはゴリラの一〇倍以上もある。でも、どんなに体の差があっても、小さいゴリラは劣位な態度を取らない。体の大きなゴリラが近づいてきて顔をのぞきこんでも、視線をそらすことなく、相手の顔をじつと見返す。自分が食べようとしていた食物を横取りされたら、ゴツゴツと不満の声を出す。決して負けていないのである。

ゴリラには、ドラミングという両手の平で交互に胸をたたく動作が見られる。成熟したオスの大胸筋の下には大きな袋が発達していて、息を吸い込むと胸が太鼓のようにフク^dらみ、たたくという音がする。二キロ四方にまで響き渡るゴリラ特有の遠距離コミュニケーションだ。これは長い間、ゴリラの宣戦布告と見なされ、ゴリラの凶暴性を示す態度と考えられてきた。野生のゴリラの行動が群れの中で観察されるようになって、やっとドラミングが戦いの合図ではないことが分かるようになったのである。ドラミングはオスの専売特許ではない。音は小さいが、メスも子供も胸をたたく。それは、遊びの合図だったり、好奇心やコウ^eフンだったり、不満の表明だったり、自己主張だったりする。特定の相手に向けられないことも多い。雨宿りを

してみんなが木の陰で休んだ後、さあ再びサイシヨクの旅に出かけようというときなど、リーダーのオスが体をぶるぶるっと震わせて雨粒を落とし、ぼこぼこぼこ胸を力強くたたいて歩み始める。とても格好良く見える。

私が驚いたのは、背中の白い大きなオスどうしが近づきあつてけんかが起こりそうになったとき、まだ若いシリーがするすつとオスたちの間に割り込んでけんかを止めたことだ。このときも、シリーは二頭のオスにかわるがわる近づいてその顔をのぞきこみ、互いを遠ざけることに成功した。ニホンザルでは決してこのような仲裁は起こりえない。体の小さなサルが大きなサル同士のけんかに介入したら、すぐさま攻撃されて仲裁どころではなくなってしまうからだ。ゴリラでそれが可能なのは、体の大きさに応じて優劣が決まっていなかったことと、勝敗をつけることがトラブルの解決とされていないからである。ぶつかり合おうとしたオスたちはどちらも負けようとは思っていない。だから実際に組み合えば、どちらもけがなしには終わらない。誰かが割って入ってくれば、けんかをせずにどちらともメンツを失わずに引き分けることができる。そこで、自分たちよりも体の小さい仲裁者に従うのである。

つまり、群れ生活に平和と秩序をもたらすルールがニホンザルとゴリラとは違ふのだ。ニホンザルは互いに優劣を認知し、勝ち負けをすぐに決めてトラブルを防ぐ。ゴリラは勝ち負けを決めずに、第三者が仲裁に入ることによって対等性を維持する。メンツを保つためには、仲裁者は小さいほうがいい。もし大きなゴリラが仲裁に入ったら、力づくで止められたということになり、メンツが保てなくなるからだ。相手ののぞきこむ行動もドラミングも、^②こういったゴリラの対等性を維持するために発達したに違いない。

こうしたニホンザルとゴリラの社会性を人間と比べてみると、人間はサルではなく、^③ゴリラに近い社会性を持っているように見える。子どものころから人間は負けず嫌いだし、トラブルを勝ち負けで解決するのではなく、第三者が仲裁して互いのメンツを保とうとする傾向が強いからだ。しかし、人間はゴリラほど^hデッテイ的に対等性にこだわるわけではない。相手に勝りたい、仲間より優位に立ちたいという気持ちも持っている。ただ、そこには慎重な気配りが働いている。勝つことによって、実は自分が不利な状況に置かれることが多いからである。

二ホンザルのように、勝つことは相手を屈服ⁱさせ、抑制させ、押しのけることを結果する。勝者と敗者は対等ではなく、勝者が利益を独り占めにする。だから、勝つても勝者は敗者と友達にはなれない。でも、負けないでいようとすることは相手と対等な立場が目標なので、相手を屈服させたり押しのけたりすることにはならない。友達を失わないし、かえって仲良くなれるかもしれないが、常にトラブルが起こる危険が生じる。そのため、間を取り持つてくれる別の仲間が必要なのである。人間はこういったことにいつも最大限の注意を払いながら暮らしている。勝ちたいけれど友達は失いたくないから、勝利を誇らず、しきりに敗者に気配りをする。サルのように利益を独占せず、みんなに気前よく分配する。ゴリラのように、自分より弱い仲裁者であっても言うことを聞いてメンツを保つ。人間は互いに対等であることに常に気を配りながら社会を作ってきたように思える。

しかし、現代の社会は効率性を重視するあまり、勝敗をつけることでトラブルを解決する傾向を強めているように見える。それは、「負けまいとする態度」を「勝とうとする気持ち」に読み替えることによって加速している。サルとゴリラのように、この二つははつきり違う社会性を作り出す。それを混同して同じものと見なすことによって、日本は競争社会を乗り切ろうとしている。鈍感な親たちは、負けたくないと思う子どもたちを見て、「勝ちたい」と思っていると誤解し、尻を叩いて勝たそうとする。その結果、不本意ながら勝利を手にした子どもたちは友達を失い、しだいに孤独になっていく。ねたまれ、うらまれ、疎^jんじられていじめにあい、孤立していく。

そんな事態を深刻化させる前に防ぐには、もう一度人間の社会の由来を考え直してほしい。人間は二ホンザルではなく、ゴリラと共通の祖先から対等性をより重んじる社会を受け継いできた。それは、互いに静かに向き合う交渉を持つことによって保たれてきた。人間らしい社会を作る上で、顔と顔を合わせ、互いの暖かい関係を確かめ合うことはとても重要なコミュニケーションなのである。IT技術は私たちに、遠く離れていても会話や情報交換ができる機会を与えてくれた。しかし、それは人間の対等な社会性を保持してくれる力を持っていない。人間が争わず、勝敗にこだわらず、対等で平等な関係を保つためには、互いに顔を合わせる機会を多く持ち、トラブルに仲間が機敏に反応して仲裁するような暮らしを設計することが不可欠

なのである。それは勝つ構えより、負けない構えの美しさを尊ぶ社会といってもいいだろうと思う。

(山極壽一「負けない構えの美しさをゴリラに学ぶ」による)

問一 傍線部 a～j のカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二 空欄 A～C に入れるのに最適な語を次の中から選んで記号で答えよ。ただし、同じ記号を二度使ってはならない。

ア つまり イ だから ウ また エ でも オ それから カ すると

問三 傍線部①について、筆者はなぜこのような行動をとったのか。五〇字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

問四 傍線部②「ドラミング」について、筆者はどのような機能を認めているか。次の中から適切なものをすべて選べ。

ア 不満の表明 イ 宣戦布告 ウ 遊びの合図 エ 好奇心の発露
オ 凶暴性の誇示 カ 格好良く見せる演出 キ 劣位な態度の表示 ク 戦いの手段

問五 傍線部③について、以下の問に答えよ。

(1) 筆者は人間の社会とゴリラの社会にどのような共通点があると考えているか。五〇字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

(2) また一方で筆者は人間の社会とゴリラの社会にどのような相違点があると考えているか。七〇字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

問六 傍線部④について、筆者はどのような社会と考えているか。本文に即して一一〇字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

次の文章は、平安時代末期、後白河院が歌謡の芸道を習い極めるまでを回想した『梁塵秘抄口伝集卷第十』の中の一節である。院は、引退していた伝説的な歌い手の乙前に出会い、彼女を師として長年、今様の習練に励んでいた。この文章を読んで、後の間に答えよ。

乙前、八十四といひし春、病をしてありしかど、いまだ強々しかりしにあはせて、別の事もなかりしかば、さりとともと思ひしほどに、ほどなく大事になりたる由告げたりしに、近く家をつくりておきたりしかば、近々に忍びて行きてみれば、娘にかきおこされて、むかひてゐたり。弱げにみえしかば、結縁のために法華經一卷よみて聞かせてのち、「歌や聞かむと思ふ」といひしかば、喜びて急ぎうなづく。

像法転じては 薬師の誓ひぞ頼もしき

一度御名を聞く人は 万づの病なしとぞいふ

二三反ばかり歌ひて聞かせしを、経よりも賞でいりて、「これをうけたまはり候ひて、命も生き候ひぬらん」と、手をすりて泣く泣く喜びしありさま、あはれにおぼえて帰りにき。

そののち、仁和寺理趣三昧に参りて候ひしほどに、二月十九日にはやくかくれにしよしを聞きしかば、惜しむべきよはひにはなけれど、年ごろ見馴れしに、あはれさかぎりなく、世のはかなさ、おくれさきだつこの世のありさま、今にはじめぬ事なれど、思ひつづけられて、多く歌習ひたる師なりしかば、やがて聞きしよりはじめて、朝には懺法をよみて六根を懺悔し、夕には阿弥陀経をよみて西方の九品往生を祈る事、五十日つとめ祈りき。一年があひだ、千部の法華經よみをはりて、次の年二月十九日、やがて申し上げて後に、法華經一部をよみて後、歌をこそ経よりも賞でしかと思ひて、あれに習ひたりし今様、むねとあるうたひて後、暁方に、足柄十首、黒鳥子、伊地古、旧河などうたひて、果てに長歌をうたひて、後世のために弔ひき。それをも知らで、里にある女房丹波、夢にみる様は、法住寺の広所にて、我が歌をうたひけるを、五条の尼、しろき薄衣に足をつつみて参りて、障子の内にゐて、さしむかひて、この御歌を聞きに参りたるとて、世に賞でて、我も目付けてうた

ひて、「足柄あしはななど常にも候はぬ。この節ふしどものめでたさよ」とほめいりて、長歌を聞きて、「これはいかがとおぼつかなく思ひ候ひつるに、めでたさよ。これを承はり候へば、身も涼しくうれしき」とみて、兩三日ありて、かくみえ候ひつる由を、女房参りて申す。さは聞きけるにや。^③しかじかありし由を語りて、我と女房たちもあはれがりあひたりき。その後、その日はかならずうたひて後世を弔ふなり。

【注】 ○結縁：読経を聴聞するなど仏法に縁を結ぶ営み。 ○像法転じては：末法の世となって仏法が滅びる時代には。 ○薬

師の誓ひ：人々の病を救う、薬師如来の十二の願い。 ○仁和寺理趣三昧：洛北にある仁和寺で行われる、理趣経を唱え

る法会。 ○朝には懺法：平安時代の天台の勤行は、朝に法華経を読んで罪障懺悔し、夕には念仏して往生を願った。

○むねとある：主なもの。 ○足柄、黒鳥子、伊地古、旧河、長歌：いずれも今様の代表的な古曲。 ○後世：死後に生

まれかわる来世。 ○法住寺の広所：後白河院御所の大広間。今様の歌い手たちが集まった。 ○五条の尼：乙前のこ
と。

問一 波線部 a～c の会話文の発言主は誰か。それぞれ名を記せ。

問二 傍線部 ①～③ の文章を現代語訳せよ。

問三 二重傍線部ア「歌をこそ経よりも賞でしかと思ひて」からうかがわれる、後白河院の乙前に対する心情を、一〇〇字以内で説明せよ。

問四 二重傍線部イ「それをも知らで」の「それ」とは、どういう事情か。五〇字以内で説明せよ。

問五 二重傍線部ウ「夢にみる様」とは、本文のどこからどこまでをさすか。はじめとおわりの句をそれぞれ四文字ずつ記せ。

次の文章を読んで後の問に答えよ。但し設問の関係で送り仮名を省いた部分がある。

張雄^a既冠^{タリテ}請^フ二字^{あざなフ}於^ニ余^{かたじけなくモ}。余辱^リ為^レ賓^ト、不^レ可^カ以^テ辭^ス。則^チ字^{シテ}之^ニ曰^フ子谿^{けいト}。

聞^ク之^ヲ老^ニ子云^フ、知^{リテ}其雄^ヲ、守^{レバ}其雌^ヲ、為^ル天下^ノ谿^ト。常德不^レ離^レ、復^{スト}歸^ス於^ニ嬰兒^ニ。

此言^ノ人^ニ有^{リテ}勝^ル人^ニ之^ニ德^ニ、而^ル操^ル之^ヲ以^テ下^{スレバ}、不^レ敢^テ勝^ラ人^ニ之^ニ心^ヲ、德^ヲ処^リ天下^ノ之^ニ上^ニ。

而^ル礼^ル居^ル天下^ノ之^ニ下^ニ。若^ハ谿^ノ之^ニ能^{ケテ}受^{ケテ}而^ル水^{スルガ}歸^ル之^ニ也。不^レ失^ハ其^ノ常^ヲ德^ヲ而^ル復^コ。

歸^ス於^ニ嬰兒^ニ。人^ニ己^ノ之^ニ勝^ル心^ヲ不^レ生^ゼ、則^チ致^ス柔^ヲ之^ニ極^{ナリ}矣。

人^{リテ}居^ル天^ニ地^ノ之^ニ間^ニ、其^レ才^ヤ智^{ナレバ}稍^ヤ異^{ナレバ}於^ニ人^ニ、常^ニ有^リ加^{フル}於^ニ愚^ニ不^ニ肖^ニ之^ニ心^ヲ。其^レ

才^{イよいよ}智^{ナレバ}弥^レ大^{フルコト}、其^レ加^{フルコト}弥^シ甚^ニ。故^ニ愚^ニ不^ニ肖^ニ常^ニ至^{リテ}於^ニ不^ル勝^ヲ、而^ム求^{スルヲ}反^ニ之^ニ。天^ニ下^ニ

之^ニ争^ム、始^{マル}於^ニ愚^ニ不^ニ肖^ニ之^ニ不^ル勝^ヲ。是^ヲ以^テ古^ノ之^ニ君^ニ子^ニ、有^{レドモ}高^キ天^ノ下^ノ之^ニ才^ヲ智^ヲ而^ル

退^{トシテ}然^ニ不^レ敢^テ以^テ有^ラ所^{フル}加^{フル}、而^ル天^ノ下^ノ卒^{ケレバ}莫^ニ之^ニ勝^ル、則^チ其^レ致^ス柔^ヲ之^ニ極^ヲ也。然^{ラバ}則^チ

雄^ス必^ク能^ル守^フ其^ヲ雌。是^レ謂^フ天^ノ下^ノ之^ヲ谿^ト。不^レ能^ル守^フ雌、不^レ能^ル為^ス天^ノ下^ノ谿、不^レ足^ス

以^テ称^ス雄^ヲ於^ニ天^ノ下^ノ。

(歸有光「張雄字說」による)

【語注】

○張雄——人名。 ○冠——成人になる。 ○字——本名とは別につける名。日常生活での呼称として用いられ

た。また本名と字は、関連があることが求められた。 ○谿——「溪」字に同じ。谷。 ○老子——書名。先秦道家

の思想書。 ○愚不肖——才智がすぐれていない人々。 ○退然——謙虚になって。

問一 波線部 a「既」b「若」c「卒」の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問二 傍線部 1「人己之勝心」とはどのようなものか説明せよ。

問三 傍線部 2「其才智弥大、其加弥甚」を、分かりやすく現代語訳せよ。

問四 傍線部 3「故愚不肖常至^ニ於不^レ勝、而求^レ反^レ之^ヲ」を、「之」が何を指しているのかを示した上で分かりやすく現代語訳せよ。

問五 傍線部 4「不^レ能^ル守^フ雌、不^レ能^ル為^ス天^ノ下^ノ谿、不^レ足^ス以^テ称^ス雄^ヲ於^ニ天^ノ下^ノ」を、書き下し文にせよ。

問六 筆者はどのような人物になって欲しいと願って張雄に「子谿」という字をつけたのか。一五〇字以内で述べよ。